

理事長コラム〈20〉『世界を生きる』

学校法人 渡辺学園理事長 菅谷 定彦

日経米州編集総局長時代⑥

米ペブルビーチは4ラウンド オーガスタは3度行きそこね

日本経済新聞の初代米州編集総局長として人的、物的両面の体制整備を固めた昭和62（1987）年4月は、5カ月間に渡るニューヨークの寒冷期が終わり、ゴルフシーズンの到来である。来客がエムパイヤーステートビル屋上やセントラルパーク、メトロポリタン美術館などを訪れた後、レストラン日本、吉兆分店での日本食を希望するのが定番コースだが、1971年から3年間の特派員時代と異なるのはゴルフプレーの希望者が増えて来たことだ。特派員の時代はこのシリーズ⑥で紹介したキセナや、マンハッタンからロングアイランド・エクスペレスウェイで1時間弱のバスページ・ブラックコース（のちにUSオープンを開催の両パブリックコースを案内したがこの2コースの欠点は現地で手続きをした後スタートまで2〜3時間待たされることだ。特派員仲間のコンペ「オフロコ」が月1回のペースで開催されたニューヨーク州のリバールは行ってみると韓国人の「アイゴー」の大声が飛び交う中、時間待ちが1〜2時間。これではパブル景気です日本の有名コースを訪れる機会の多い来訪者を失望させるだけだ。

87年5月初旬、清泉女子大学教授をしていた妻の孝子が連休を長めにとってニューヨーク入り。早速、私のニューヨーク特派員時代にも親しくしていた山口進・米スター・マイクロニクス社長、浩子夫妻からテニスを自宅から車で20分のボニー・フライヤー・カントリークラブでいかかとの連絡が入った。浩子夫人は早稲田大学庭球部の私の同期生で女子部主将、1年上の孝子とは大の仲良しだった。マンハッタンから車で北へ40分、ソーンウッドの山口邸で落ち合い、ボニー・フライヤーで山口社長を混えダブルスを楽しんだ後「このゴルフ場は入会可能か」と山口氏に聞くと、ゴルフでも名プレーヤーで日経米州編集総局長の菅谷さんなら問題なく入れますよとの回答。

1週間後に山口社長が本人入会前にもかかわらず面接の手配をしてくれ、理事長と2人の理事から「日本人は5人目だが、ゴルフとテニスだけでなく夫人同伴のパーティなど行事にも参加して欲しい」と要請され、「妻は日本で大学教授をしているので日程的に難しいが努力はします」と答え入会金6千ドル（当時のレートで87万円）の入会次第メンバーにすると承認された。

直ちに日経東京の窓口である市岡楊一郎国際総部長、編集局の財務担当船山庄一（整理本部長と折衝、日経と私個人が3千ドルづつ負担することメンバー入りを決めた。そのゲスト第1



1974年1月 米西海岸ペブルビーチゴルフリンクス18番ホールを歩く
写真右手は海



1987年5月 NY入りした妻孝子と山口夫妻自宅前で

号はこのコラム⑥で紹介した大阪大学医学部の当時助手（のち教授）の多田彦彦君で、その後も米国での学会発表のたび計3回プレー、多くの友人、知人にもマンハッタンから車で40分のダイナミックなコースを楽しんでもらった。1989年3月の帰国に当たりクラブ側から「年会費を半分払い続けられ永久会員の資格を与える」と提案されたが、辞退した。

3年間の特派員、2年間の総局長を通して米國を代表するゴルフ場の多くでプレー出来たが、最も優れていると思ったのはカリフォルニア州・ペブルビーチにある「ペブル・ビーチ・ゴルフリンクス」である。特派員時代の最終年1973年の秋、自動車工業会のワシントン事務局長で毎日新聞の海外特派員を多く務めた小西健吉氏から「菅谷さんも私も任期終了が近いので、ゴルフ・ダイジェスト誌の調べで米国内ゴルフ場トップ10に入る、ペブルビーチを回りたい。コースに隣接したデルモンテ・ロッジに泊まればプレー出来るのでこの手続きは私がやるが、毎年1月初めのピング・クロスビー・プロアマで使われる3つのコースのうち全米ランク40位台のスパイグラスヒルはプレー可能だが、50位グループのサイプレス・ポイントにはメンバーコースなので、菅谷さんの人脈でなんとかプレー出来ないかとの電話だった。

私は仕事の日程上、ピング・クロスビー・プロアマ戦の翌週なら3泊4日で行けると即答。直ちに西海岸にも強いネットワークを持つ日本郵船の岡村俊夫常務・ニューヨーク支店長（のち本社専務）と旧知の石川芳一取締役副支店長（のち本社常務）をウォール街のオフィスに訪ね同社取引先でサイプレス・メンバーがあらればとお願ひ了解をとってもらった。その後、3泊4日でペブルビーチ4ラウンド（小西氏は3ラウンド）平均スコアは89をマーク、サイプレスポイントとスパイグラスヒルは各1ラウンドを全て男性キャディー付きの徒歩でこなすスコアは85〜92だった。

特にペブルビーチは、私が在米5年間でプレーした同じくトップ10のオリンピック・クラブ（サンフランシスコ）、バインハーストNo.2（ノースカロライナ州）、バインバレーGC（ニューヨーク州）もそれぞれに个性的かつ偉大なコースだが、名手ベン・ホーガンらが全米No.1の18番ホールと指名したペブルビーチは何度でもプレーしたいと恋愛に近い感情さえ覚えた。

2021年、松山英樹選手が初優勝したマスターズ選手権開催のオーガスタ・ナショナルGC（ジョージア州）も全米ベスト10に入っているが、残念なことに、3度行きそこなった。ニューヨーク特派員時代に仲良くしていたいたたチャンピオン・ファーストナショナルシティ銀行会長からは2度「私がメンバーなので一緒に行く」と連絡があったが重要な取材と重なったため断念した。もう1回は総局長から帰国後東京編集局総務時代の1989年秋、伊藤忠商事の室伏稔副社長（翌年社長）にオーガスタへ同行プレーを要請があったが、日経常務会で長期計画の課題発表・説明と日時が重なったためこれも断わざるを得なかった。

訂正 日経ニューヨーク特派員時代⑥でファーストナショナルシティ銀行会長をチャブマンとしたのはチャンピオンの誤りでした。

※次号は「世界を生きる」

「日経米州編集総局長時代⑦」です